第二章ノ三

下記の（一）と（二）は（）だけを打って置くこと

三 四 対南方作戦

（一）南方へ

十二月八日未明に行はれた真珠湾攻撃と全時に我が対南方作戦は展開せられた。

即ち対米英戦争に於ける日本軍の主作戦は南方各地域に於て行はれるのである。

つて真珠湾攻撃は寧ろ其の補助作戦といへるのである。

南方作戦の目的とする支那事変の長期的解決を図り南方の資源を獲得すると共に

米英蘭の経済的包囲を打破する

南方作戦の目的は米英蘭の経済的包囲を打破する

記せる如く此の本来の目的は米英

対支政策に対応の為の戦争遂行上経済的態勢を確立

即ち

（1）米英の根心南西に至る長躯を敢行し落敢樹の抗戦意志を喪失せしめ

（2）北進事態の解決を促進せしむ

（3）米英の勢力を東亜より一掃して南方民族をして米英依存より脱

即せしめる。

（7）太本営陸軍部記録（内閣情報局編纂）

~~南方作戦記録による~~

而して南方作戦全般を通じ米英の第一の基地たる「マニラ」「シンガ

（2）及南方に於ける資源の主流を獲得

ポール」の攻略は南方作戦の重大志向をもつものである

然乍ら此中米国の根拠地たる比島米に其の首都たるマニラ」を攻略す

ることは戦略的にも政治的にも又経済的にも重要視せられねばなら

ぬ所である。

（二）開戦準備

（1）中央部の準備

南方作戦の準備の大部分は中央部に於てなされ、南方軍は之を踏

襲したのである。

一九四一年

昭和十六年十一月六日南方軍司令官に対する戦闘序列が

第四節　對南方作戰開戰準備

（一一七頁より一二一頁迄の一部改正意見）

一九四一年十一月五日御前會議に於て戰爭決意を固め武力發動時機を十二月初頭と定め之に基き陸海軍は作戰準備を完整することに決定せらるるや、大本營陸海軍部に於ては次の如き措置がとられた。

即ち陸軍部に於ては、同十一月六日附を以て南方軍並に其の隷下各部隊の戰鬪序列が下令せらるると共に作戰準備に關し左の要旨の命令が發せられた。

大本營は南方要域の攻略を準備する。

南方軍總司令官は海軍と協同し主力を以て印度支那、南支那、臺灣、南西諸島及南洋群島に集中し、南方要域の攻略を準備すると共に對支封鎖強化に關する第二十五軍司令官の現任務を繼承すべし。

但し進攻作戰の開始に關しては別命する。

又米英蘭軍又は其の一國軍の攻撃を受けた時は自衛の爲所在の部隊を以て之が處理に方つては極力局地解決に努むるものとす。

作戰要領としては聯合艦隊と協同し比律賓及英領馬來に對し同時に作戰を開始すると共に作戰を概ね左の三段階に區分す。

第一期作戰　馬來、英領「ボルネオ」、比律賓及北「スマトラ」を攻略する。

第二期作戰　「ジャバ」を攻略する。

第三期作戰　「ビルマ」處理作戰を豫定する。

大本營海軍部に於ては十一月五日附大本營海軍部命令を以て、聯合艦隊に對し適時所要の部隊を作戰開始前の準備地點に進出を命じた。

更に同日聯合艦隊司令長官は聯合艦隊命令作第一號を以て麾下部隊に對し對米英蘭戰爭に於ける聯合艦隊の作戰に關し命令を下した。

同命令に於て南方作戰には機動部隊を除く聯合艦隊の大部を充當することとし南方部隊指揮官には第二艦隊司令長官近藤信竹を任命した。

南方作戰要領は大本營陸軍部が南方軍總司令官に下令した前掲の命令

と略ゝ同様であるのでここには省略する。

右に基いて一九四一年十一月十日南方軍總司令官及第二艦隊司令長官は東京に於て必要な作戰協定を行ひ更に十一月十四日には山口縣岩國に於て南方軍隷下各軍と關係各艦隊との下に所要の作戰協定並に作戰打合せが實施せられた。

一九四一年十一月中旬南方軍總司令官は左の趣旨の大本營命令を受領した。

「大本營は帝國が自存自衛を完うし大東亞の新秩序を建設する爲南方要域の攻略を企圖する。

南方軍總司令官は海軍と協同し速かに比律賓、英領馬來、蘭領印度の各要地及「ビルマ」の一部を占領すべし。

但し進攻（進入）作戰開始に關しては別命する（註、第一部第二章本作戰實施に當りては〇〇勉めて泰國及印度支那の安定を確保すると共に南方面より對支封鎖を實施す。

占領地の治安を恢復し重要國防資源を取得し且自活の途を確保する爲占領地に對し軍政を施行す。」

南方軍總司令官は右に基き隷下各軍に對しそれぞれ攻略に關する命令を下令し次の如く攻略目標を定めた。

第十四軍　比律賓攻略

第二十五軍　馬來攻略

第十五軍　泰國安定確保

川口支隊（第十八師團の歩兵一聯隊基幹にして陸軍少將川口健之を指揮す）英領ボルネオ攻略

五軍より分離した外は〇後述の戰鬪序列と大差なし。また進攻（進入）作戰開始に際しては「ワシントン」に於ける外交交渉の結果を待つ樣嚴に戒められてゐたので本攻略命令に於ても別命する樣明示されてゐた。

78 (一) 1941.11.20 南方軍總司令官命令

79 (二) 大本營命令 1941.12.1

一方海軍部隊は臨戦準備を進めてゐたが一九四一年十一月二十一日附大海令に依り作戦實施に必要なる部隊を適時待機海面に向け進發せしむべき命を発せられ此等部隊は十一月下旬作戦地に向け進發した。

更に十二月一日附大海令を以て帝國の開戦決意及任務を下令され翌十二月二日には武力發動時機を十二月八日以後と指令せられた。

（註）大海令第十二号（一九四一、十二、二日）

一 聯合艦隊司令長官は十二月八日以後大海令第九号により武力を発動せよ

二、蘭印及英国に対しては米国及英国に次で採宜武力を発動すべし

三、細項に関しては軍令部総長をして之を指示せしむ。

~~（二）大海令第十二号（1941.12.2）~~

(三) 南方進攻作戰の開始

南方諸地域に對する開戰作戰は十二月八日の開戰と時間を同時に開始せらるべく計畫されたのである。

本作戰計畫は比島及其領「マレー」に對し同時攻撃を開始し時間的間隔を與へて敵に予め備へしむることを避け乍づゝ各地所在航空兵力及艦隊に對して先制空襲を加へ以て敵の戰意を喪失しつゝ速かに我航空基地を推進し乍航空作戰を開始することを緒戰の主眼とした。

而して比島に對しては先制空襲によつて敵の航空兵力を殲滅しメその地上兵力の揚陸を待つて地上兵力の奇襲と同時に敵前上陸作戰を行ふべく計畫された。

南方作戰中右開始並に奇襲の時期はその目的を達することに努力を集中し

(イ) フイリツピン　廿五十日 廿

(ロ) 蘭　廿百日 廿

(ハ) 南　廿百五十日 廿

を以て上陸並進攻據點を獲得すべく予定されたのである。

此等に於て南方部隊は十一月二十四日内海西部を發し、馬公に集出し其の他諸部隊も右と前後して内地海域を離れて定められた集合地に移動した。

此の大規模な行動は極めて秘密裡に行はれ本隊及比島攻略の大部航空部隊の大部分は台湾方面に、馬來部隊は海南島及佛印に、大部及航空兵力を含む一支隊は「パラオ」へ向つたのである。

他馬來部隊の航空隊中基地航空隊は南部佛印に、水上機部隊は輸送船隊に搭乗して佛印沿岸諸地域にいずれも十二月六日迄に配備を完了した。

敵艦隊の出撃に備へる機雷部隊は既に十二月一日及三日に三回を出撃し、其一隊の辰宮丸は十二月六日夜「ゲエマジア」島西方の豫定地點

(ロ) ~~南方作戰記錄~~
(ハ) 大本營陸軍作戰部長田中中將記憶

に四五六個の機雷を敷設に成功し歸還したが他の一隻長沙丸は英國飛行機の觸接を受け企圖を棄てゝ歸還した。

又「シンガポール」海峽東口附近に敷設の企圖をもつていた潜水艦二隻も同様行動を起したが敷設の目的を果せず歸還した。

「シンガポール」東方から北方に亘り配備せられた潜水艦部隊の潜水艦十二隻は十二月一日以後逐次進出して十二月七日には全部予定の配備に就き上陸點及「シンガポール」の天候偵察を行つた。

豫想攻撃要點に對する空中偵察は「ルソン」島内要地に對しては十一月二十日及十二月五日に行つた。[82]

以上の如き戦闘開始準備を終り遂に十二月八日の開戦となつたのである。

第一　比島作戦[83]

比島上陸作戦に於ては日本軍は先づ航空兵力を以て比島の米軍航空兵力を撃滅し其の制海權を獲得したる後上陸作戦に移る極めて安全且確實

82 満軍ガイ攻略作戦記録
83 第一復員局編纂、比島作戦記録

なる方式を採用したのである。

開戦劈頭に於ては日本航空部隊は航空奇襲に依つて緒戦の成功を納め之により比島攻略軍主力の輸送と南比攻略に対する準備を完成したかくして比島に対する我陸の作戦は概ね豫想通りに進歩し多大の戦果を挙げ殆んど無抵抗の状態に乗じ首都「マニラ」占領後南方軍司令部は比島方面の兵力を抽出したこと重視したる事と、米軍主力が「バターン」半島に撤退したこと、米軍は爾後の比島作戦に対する支障を來す事となつた。[84]

尚比島作戦に就ては本書の重點が「マッカーサー」元帥作戦の歴史にある故を以て章を改めて之を紀記する事とし以下南方作戦の概略の大略を順記する事とする。

第二　馬來作戦[85]

馬來作戦は奇襲上陸を以て第一撃とすることなく第一次の牛歩兵力を奇襲的に上陸せしめ側面に一部の牛歩兵力を上陸せしめ航空兵力を強化し航空基地を推進して航空兵力を強化し

84 (一)
85 (二)復員局編纂、馬來作戦記録
86 (三)大本営十二月三日南方軍ニ対スル命令

荒木光太郎文書 727

後續部隊の揚陸を容易ならしむるにあつた。然し乍ら此の場合敵の有力なる艦隊を放任し置くが故に海軍は之が出撃を阻止する為極めて重要なる任務を持つて居たのである。

之がために先づ航空部隊及潜水艦の一部は馬來の南東海面及英領「ボルネオ」沖に機雷を敷設すると同時に潜水艦の全力を以て馬來東方に散隊の散開線を布いて敵艦隊の出撃に備へることゝした。

基地航空部隊は南方作戰準備及「パラオ」を基地とし、合計三〇八機を以て比島に在る敵空軍并に大型機を攻撃主目標とし、西方は合計一〇四機を佛印基地に展開して先づ「シンガポール」附近の空軍主力を撃破し爾後陸軍航空部隊と協力して敵空軍殲滅を企みることゝした。

但し敵の有力なる海上兵力の出現に際しては機を逸せず之を撃滅する用意のあつた事は勿論である。

十二月二日馬來部隊〔第二十五軍〕は輸送船二十隻と海防艦十雙「フ

(一)清與軍攻略作戰記録

ロク」島に、輸送艦七隻と海防艦香椎は「サンジャック」に進出し「サイゴン」に待機中の其の他の輸送船十六隻と隷直部の南方部隊をはじめ馬來部隊各部隊はいずれも十二月四日各々待機位置を出發し先發諸隊之に策應して全軍作戰地に向つて行動を起した。

而して馬來方面上陸第一次たる第二十五軍船団の輸送護衛は南遣艦隊第三飛行集団がこれに當つた。

第二十五軍の先遣隊〔第五師団主力及第十八師団の一部兵力〕は十二月四日陸軍第三飛行集団の輸送護衛のもとに海南島を出發十二月八日第三飛行集団の航空兵力の掩護に續いて「シンゴラ」附近及び其の一部は「コタバル」附近に上陸を敢行した。

かくて輸送船団は護衛部隊の直接掩護の下に豫定通り十二月八日午前四時頃何れもその企圖上陸に成功した。「コタバル」に向つた支隊のみは敵飛行機並に砲台の有力な兵力を以て邀撃し泊地進入後

場中を明かしたるに拘らず敵飛行機搭載機の攻撃に妨げられて中止の止むなきに至つたが同日夜に入り更に諸術兵力を増強して之を再開し若干の損害はあつたが遂に上陸に成功した。

之と同時に十二月八日〇五、〇〇〔東京時間〕英領海峡植民地第二十二航空戦隊の陸攻二十二機は長駆「シンガポール」島の諸施設を爆撃して我皇軍の作戦を容易ならしめ次で十二月十日午前の第一次攻撃と共に八十六機は馬來東方海面に於て不沈艦と謳はる英戦艦「プリンス、オブ、ウエールス」及巡洋戦艦「レパルス」を撃沈し英海軍の作戦を拘束するところ大であつた。(一)88

「計」是迄問題となつて居た航空兵力を以て戦艦を撃沈し得るや否やの問題は之によつて解決し作戦上大いに参考となる点があつたと共に皇軍の士気を鼓舞するもの大なるものがあつた。

馬來第二次上陸部隊は輸送船団十三隻に搭乗し十二月十三日「カムラン」湾を出撃前進水路に対する海軍部隊の掃海なる警戒のもとに十二

月十六日無事目的地に到着上陸を開始した

其後第三次は十二月二十六日「サンジャック」に十二月二十七日「シンゴラ」等に

第四次〔第三艦隊五十六隻〕は十二月三十一日馬來東海岸一九四一年一月八日「シンゴラ」及「バンコック」等に夫々到着し

以下同じ重ねて後續部隊は順次陸揚され陸海軍諸部隊は行に入れた。

而して上陸作戦の成功と共に我航空兵力は直ちに其地を同地に進め多の困難を排して創空襲を敢行し地上軍の作戦を容易ならしめると共に上陸軍は直ちに進撃を開始した。

中部馬來以南に於ける皇軍の前進は概して順調に発展し順次に敵を撃破しつゝ一月末日には夫々馬來南端の「ジョホールル」水道に到着し二月十五日「シンガポール」は陥落した。(二)89

第三 泰及緬甸方面

第十五軍司令官飯田中將指揮下の近衛師團は十二月八日木村兵團と

(二)89 第一復員局編纂「緬甸作戦記録」に依る

蜂起することなく僞印國境より泰國に進駐を完了すると共にその一部は南泰方面に海路より上陸して所在の飛行場を確保した。又第五十五師團主力は一月初頭以降「ラヘン」附近地區に又第三十三師團は一月十一日以降「バンコック」に上陸し次で「ピルマ」作戦に參加した。(一)

第四　「ボルネオ」方面(二)

英領「ボルネオ」上陸作戦を決行したのは陸軍川口支隊（横須賀第二警別陸戦隊を含む）である。

海軍は直接護衛として第十二驅逐隊を主として木巡二、水上機母艦一其他を以て之を支援した。

川口支隊は同隊は輸送船一〇隻に搭乘し海軍部隊の護衛下に十二月十三日「カムラン」灣を發し十五日夜半「ミリ」附近に到着し入油ト称して上陸を行ひ十六日午前中に「ミリ」附近一帶を占領、油田地帶を確保し又飛行場を整備して二十二日には早くも海軍航空隊の中型陸攻九ト戦闘機六が基地に進出した。

136

(一) 第一復員局編纂ボルネオ方面作戦記録

(一) 1942年一月二十二日 大本営ハ南方軍総司令官ニ対シ海軍ト協同シテ緬甸ノ要域ヲ攻略スベキ命令発令

支隊の一部は陸戦隊を基幹とする一隊は十二月二十二日更に「ミリ」より「クチン」に輸戦し次で二十五日「クチン」市を占領したのを始めとし「ブルネイ」「ラブアン」島「ゼッセルトン」「ベンガヤン」及「タワオ」等の主要地區を夫々占領した。

輸領「ボルネオ」方面からは蘭領に「ホロ」島を占領した坂口支隊は更に輸進して一月十一日「タラカン」を一月二十四日には「バリックパパン」を占領した。

伊國戦と共に泰領を攻略し十二月末之を攻略した第三十八師團は一月四日第十六軍の戦下に編入せられて主力は爪哇作戦に參加し其一部であるは伊東支隊は一月二十一日南の拠点を排除して「アンボン」を攻略した。

137

No.

第五　佛印方面 (一)92

我が軍は一九四一年七月以来万一の場合に備へ佛印における方面の航空基地、補給基地、補給通信施設、気象機関等の整備に努め、方十の開戦に備へるものとしてあったが、十二月八日、日佛間に日佛協同防衛の軍事的要項締結以来佛印は極めて静穏なる情勢にあり、同方面の安定確保のため第二十一師団は一月末以降海路より逐次到着した。

(一) 第一復員局編纂　仏領印支那方面作戦記録に依る

荒木光太郎文書 727

11

8

No.

ホ文

南洋委任統治領方面

海軍の南洋部隊は開戦と共に既定計画の基き、南洋海域の防衛を任ずると共に先づ航空部隊の全力を挙げて「グワム」島、「ウエーキ」島及「ハワイ」島の敵航空基地を急襲し引続き、攻撃を繰り返して敵の空襲企図を粉砕した。

一方陸軍南海支隊と協同して十二月十日「グワム」島を奪回した。

ことに依り

日本委任領域の中央を孤立してゐた米国軍事基地は悉くとり除かれたのである。

10×20 B5

(一) 海軍記録 2

(一) 沖田艦隊作戦記録

荒木光太郎文書 727

12

No.

又、十二月十日陸戦隊を以て「マキン」「タラワ」両島を占領し「マキン」島には直に之進航空基地を設営した。

「ウェーキ」島に対しては攻略は右の如く容易ではなかった。

海軍陸戦隊（主力木村）は「マーシャル」諸島基地から連日空襲をかへた後十二月十日未明敵陸戦隊は艦砲射撃と陸を進めたが風浪の障碍と残存飛行機の有効な攻撃を受け之を撃退し中止して避退せざるを得なかった。

此に於いて海軍は陸戦隊を増強し訓練と研究を加へ陣容を改め

10×20 B5

荒木光太郎文書 727

13

No.

且室中攻撃の万全を期して布哇作戦からの帰途のあった第二航空戦隊（母艦二隻）をも加へ十月二十日、十一日の空襲に参加せしめ、十二月二十二日の初半攻略部隊（を以て再出）は風浪と砲火を冒して敵前上陸を強行し、二十三日全島を占領した。

ウェーク島の航空基地の整備利用により更に我が南洋防衛線が保強せられたことは勿論である。

荒木光太郎文書 727

16

No.

七、中國方面(一)93

中國方面陸海軍部隊は陸海協同し馬来方面に対する作戦用地を確認したる後香港に対する作戦を実施し且英租界を接收すべき任務を受領(第二三軍(第十八師団)及第二遣支艦隊(第二十五戦隊))

加香港攻略に当る事となった(二)94

(一九四一年十二月九日)

第二十三軍は航空部隊の第一挺身隊と共に十月九日第三十八師団基幹部隊を以て国境を突破し十四日九龍半島の攻略を終了した。

引続き十二月十八日陸海協力の下に香港島の

93 (一)第一復員局編纂 支那方面作戦記録による

94 (二)大本営十二月一日支那派遣軍総司令官に与える命令

15

No.

攻略を開始し（同）二十五日英軍の降伏により作戦は終了した。

又別に英軍陸海軍部隊は香港攻略開始と共に陸海軍協力し上海、天津、漢口の租界を接収した。

斯くの如くして中国（中国）に於ける英米の努力は取除かれた。

10×20 B5

荒木光太郎文書 727

No. 6

以上のごとく

陸海軍共に◇

(日本陸海軍とも)

戦略に於ては予期以上の成果を

収めつゝ未来をして守勢に陥らしめ

(立つのどちらを得さるにせよ)

為に我が日本本土

(容易とならん)

の防衛は極めて有利ならしめ未に既定計

(に基きたる方攻略)

画の地域に於ける資源の確保並に未来に対す

る重要資源の使途遮断等長期戦遂行可能の條

件が備はりつゝあるにが現戦勢の活用によ

りては守勢より攻勢的戦略態勢に移し得る機運

を作るに至たのである。唯比島に於ては

日本

比島はマッカアーサー元帥の抵抗に

遭ひ

われわれ作戦

バタン主島に於ける陽動せざる

作戦(四月初めまで)

合し攻略を完了することが出来なかつた

10×20 B5